

これまでの審議会（部会）の 議論のまとめと 今後の予定について

令和7年7月7日

地域コミュニティ活性化推進審議会資料

これまでの議論の振り返り(令和6年度)

● 次期ビジョンの検討に向けて

- ・ 京都市の総合計画である「京都市基本構想」、「京都市基本計画」、「各区基本計画」、分野別計画である「地域コミュニティ活性化ビジョン」はそれぞれ令和7年度に期限を迎える。
- ・ 京都市全体の構想との整合を図りながら、今後の方向性について議論を進めていく。

● 次期ビジョンにおける取組の方向性

- (テーマ1) 地域住民をはじめ、大学や地域企業など多様な主体が地域活動に参加しやすくなるきっかけや担い手を増やす仕組みづくり
- (テーマ2) 活動見直しやデジタル活用、負担軽減策など、持続可能な地域コミュニティに向けた仕組みづくり

⇒ 上記2点を集中的に議論し、ビジョンに盛り込むべき視点や方策を深めてきた。

部会における検討経過(テーマ1)

【テーマ1】地域住民をはじめ、大学や地域企業など多様な主体が地域活動に参加しやすくなるきっかけや担い手を増やす仕組みづくり

開催概要

<第1回部会>

- 日時 令和6年10月31日(木) 午後6時~7時25分
- 場所 京都市役所分庁舎地下1階 文化市民局 会議室
- 出席者 中本部長、宇野委員、尾崎委員、河合委員、森本陽介委員、志藤会長、前田副会長

<第2回部会>

- 日時 令和6年12月4日(水) 午後6時~7時25分
- 場所 京都市役所分庁舎地下1階 文化市民局 会議室
- 出席者 中本部長、宇野委員、河合委員、橋本委員、前田副会長



第1回論点まとめ

現状・可能性	課題	できたらいいこと
<p><活動への参加について></p> <ul style="list-style-type: none">・(HPなど)自分で調べて・講義を受けたことをきっかけに・紹介されて <p><活動の継続について></p> <ul style="list-style-type: none">・地方出身学生の居場所に・専門分野を活かせる・やりたい人の思いを大切に <p><連携について></p> <ul style="list-style-type: none">・活動を通じて交流が生まれている・交流により出展団体同士の目的が達成されている・(大学など)域外の協力	<ul style="list-style-type: none">・情報不足・便利使いされる・主体性が発揮できない・関わりたい人と地域団体にギャップ・大学や行政主導では続かないことが多い・地域内に資源がない・何が資源となり得るかわからない	<ul style="list-style-type: none">・地域活動、ボランティア活動等の説明会の場・地域の魅力や活動の発信・お互いのニーズや期待値を共有するコミュニケーションの場(マッチング機能)・地域資源や団体の活動の見える化、交流の促進

第2回論点と方向性

【理想的な状況】

- 地域活動やボランティア活動を知る機会や学生・企業等の多様な主体が交流できる機会や場がある。
 - 地域活動に関わりたい主体と地域団体とのギャップを埋めることができる。
 - 学生や地域企業等も一主体として、(自身の得意分野等で)地域と一緒に活動に関われる。

⇒ 「地域課題の解決」や「やりがいや楽しさ」、「活動の継続性」の好循環の実現

<第2回部会で深めたい視点>

- ・ 地域の中でそういった場や機会を増やしていくために、現状できていることや、現在の取組に付加すべきこと、新たに実施すべきことは？
- ・ 学生の意識にも濃淡があることを前提として、追加すべき視点や取組は？

<新たに御意見をいただきたい視点>

- ・ 「地域活動に接点を持ちにくい地域住民」への働きかけ方、接点の持ち方は？
- ・ 「地域企業」や「NPO」等について追加すべき視点や取組は？

第2回部会における主な意見

<活動への参加や継続に係る意見>

- 地域活動に関わりたいと思っている人と、地域団体との間にはギャップがある。
- 地域側が、子ども、環境、文化など、活動に対してラベリングすることができれば、そのラベルに関する活動を求める人達が集まってきやすい。
- 強制が参加のきっかけにはなるが、長続きがしない。
- 「必要性」だけではなく、「楽しめる」「子連れで行ける」等のきっかけが大切。
- 単位付与などもきっかけの1つだが、課題等を提供する大学・地域に疲弊の恐れ。
- 高齢者の中にも支えが必要な方ばかりでなく、自分の力を発揮して地域に貢献したい人がいるが、その場がないと考えている人が多い。
- 自分の表現したいことややりたいことで活動できると長続きしやすい。
- 肩書や立場に縛られずに出会える場があれば、その人個人の興味や考え方がわかる。
- 楽しいし行ってみようかと思えるような場がまずあって、その中で参加者がお互いの課題感を共有するという順番の方が、お互いを知ることができ進む方向を決めていけるのではないかと。
- 多世代交流の場や参加者にも出番があれば、顔の見える関係やつながりが生まれるのでは。
- 地域の魅力や活動が発信されていると参加しやすい。

<連携・デジタル等に関する意見>

- 企業側も地域に接点を求めている。
- 交流の場は一定数あるので、掲示板やSNS、大学・NPO経由など広報にも力を入れる。
- 活動に協力を求める時にはどういう意図や思いで行う活動か、どんなメリットがあるかを示すことが重要ではないか。
- 大学や企業などの分かれているセクターをつなぐ場や人の役割が大事ではないか。
- 行政や大学など大きな主体だけでなく、間に入る人材を確保、拡げることが大切。
- 社会活動に熱心な企業等のネットワークから、協力や活動の幅を広げやすい。
- デジタルも活用することで関わり方の選択肢が増える。
- ウェブアンケートでこれまで拾えなかった声を拾うことで活動見直しにも役立つ。

部会における検討経過(テーマ2)

【テーマ2】活動見直しやデジタル活用、負担軽減策など、持続可能な地域コミュニティに向けた仕組みづくり

開催概要

<第1回部会>

- 日時 令和6年10月29日(火) 午後6時~7時30分
- 場所 京都市役所分庁舎地下1階 区長会室
- 出席者 玉村部会長、荒川委員、岩井委員、丹治委員、野村委員、行元委員、志藤会長、前田副会長

<第2回部会>

- 日時 令和6年12月10日(火) 午後6時~7時30分
- 場所 京都市役所分庁舎地下1階 文化市民局 会議室
- 出席者 玉村部会長、荒川委員、岩井委員、野村委員、森本つばさ委員、行元委員、志藤会長、前田副会長



第1回論点まとめ

現状・可能性	課題	できたらいいこと
(デジタル活用について) ・教えてくれる人(若い世代)がいる ・スマホ講座へのニーズ ・「寿司屋のアプリ使いたい」がデバイス対策の一步目にも ・情報伝達や魅力発信など一方向 ・隠れた経費と時間の削減 ・柔軟な活動への理解促進	・高齢世代の苦手意識 ・これまでのやり方変更への反対意見 ・移行期の工夫 ・コミュニケーションには不向きな面も	・若い世代等によりスマホ講座が広がる ・リアルとデジタルのバランスが図られている ・地域の魅力が伝わる
(活動の持続可能性について) ・関わる人の主体性 ・地域と関わる団体(学生)の思いが同じ方向に ・何度かぶつければわかり合える	・関わりたい人と地域団体にギャップ ・大学や行政主導では続かないことが多い	・お互いのニーズや期待値を共有する ・コミュニケーションが行われている
(活動見直しについて) ・新しい人が入り、多様性への理解が進めば地域も変わり得る	・メンバーが固定化し、活動マンネリ化 ・(外国人など)広く関係する当事者の声を拾う必要	・多様な人、主体によるコミュニケーションを基に新たな選択肢や取組を検討していく

第2回論点と方向性

【理想的な状況】

- 性別や年齢、国籍など地域を構成する人の多様性を踏まえ、双方向のコミュニケーションを基に、誰もが参加しやすい関係性で活動が行われている。
 - 若い世代とデジタルを苦手とする高齢者など、様々な主体の交流により関係が築かれ、デジタル活用のきっかけが生まれる。
 - リアルとデジタルのバランスが取れ、情報発信の迅速化や魅力発信の強化、役員等の負担軽減が進む。
 - 地域活動やボランティア活動を知る機会や学生・企業等の多様な主体が交流できる機会や場がある。
 - 地域活動に関わりたい主体と地域団体とのギャップを埋めることができる。
 - 学生や地域企業等も一主体として、(自身の得意分野等で)地域と一緒に活動に関われる。
- ⇒ 「地域課題の解決」や「やりがいやすさ」、「活動の継続性」の好循環の実現

<第2回部会で深めたい視点>

- ・多様性への理解や双方向のコミュニケーションを進めていくに当たり必要な視点や取組は？

<新たに御意見をいただきたい視点>

- ・「地域活動に接点を持ちにくい地域住民」への働きかけ方、接点の持ち方方は？
- ・「地域企業」や「NPO」等について追加すべき視点や取組は？

第2回部会における主な意見

<住民や多様な主体の参加促進に係る意見>

- 学生は面倒を避けたり、熱意がないように見られがちだが、空気を読むなど非認知的なコミュニケーションをとっており、見えにくくなっている側面もある。
- 地域との関わりを大事にしたいと中小企業が多いが、儲けのためと捉えられがち。
- 思いを持っている企業は多いが、つなぐ人やつながる機会に課題。
- 地域側が求めることを明示することで、企業が関わりやすくなるのではないかと。
- 子育て世代向けのイベントで地域との接点をつくるなど、参加のハードルを下げる。
- 参加したくても参加できない層がいる。
- 活動に参加していない30~50代を地域につなげる人がいない。

<活動見直しなどの取組に係る意見>

- 親しみやすさや参加しやすさを仕組みとして工夫することが大切。
- 受け入れる地域側が参加者の本音を引き出せるように変わっていかなければならない。
- お互いを分かり合えるコミュニケーションや自分の素姿を出せる接し方が重要。
- 温かく迎える等柔軟に受け入れることで、笑顔が増えたり場の雰囲気明るくなる。
- 相手が受け取りやすい形や、アクションを起こしやすいような発信があるとよい。
- 組織や役職としては、役割や任期の壁があるため、1個人として面白がりながら取り組むことが持続可能性につながるのではないかと。
- 時間や場所に縛られない、イベントだけ参加、オンライン会議など、関わり方の選択肢を増やすことが重要。
- いろんな取組に協力してくれる応援団を地域内にたくさん作ることができれば、架橋しやすくなり、一緒にやっという雰囲気になるのでは。
- 主体間が協力を進めていくためには、公平性や信用力が高い行政や公的な機関がつなぐ役割を担うことが大事。
- 双方の気持ちを理解でき、誤解が生じないようケアする人が重要。

これまでの審議会(部会)まとめ(全体像)

地域の現状と課題のまとめ

市民の状況 (地域住民、学生、企業など)	市民とまちづくり活動の関係	まちづくり活動の状況 (自治会等の活動など)
<ul style="list-style-type: none">・まちづくり活動との接点がない。 (忙しい、興味・関心が低い、知る機会がない等)・参加したくても参加できない。 (どこに相談すればいいかわからない。)・主体的に関われないと続かない。	<ul style="list-style-type: none">・市民とまちづくり活動の間のギャップ (やらされ感、市民の本音や主体性が出せない・引き出せていない・・・)・思いをつなぐ人がいない・昔ながらのやり方が強制される・役割や当番はきっかけになるが、それだけでは続かない	<ul style="list-style-type: none">・担い手がない・参加者の固定化、活動マンネリ化・主体同士のネットワークがない・役割・当番・使命感で運用・引継ぎ優先で見直し機運が生まれづらい・新しい取組(デジタル化など)が進みづらい



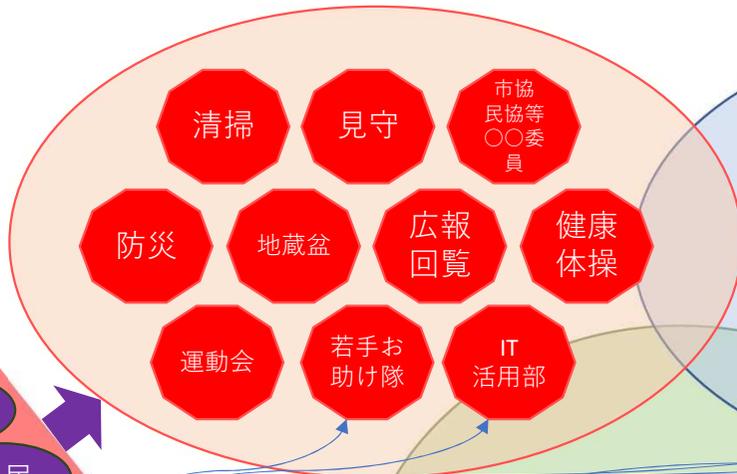
両部会の議論を踏まえた取組の方向性

- まちづくり活動参加へのきっかけや入口を増やしていくには、住民の興味関心や思い等をベースに、まちづくり活動に関わりやすい形を地域の中で増やしていくことが重要。
⇒「まちづくり活動の見える化・魅せる化」、「気軽に参加できる機会の創出」など
- 持続的・主体的にまちづくり活動に関わっていくには、当番や決まった役割の人だけではなく、多様な人の話し合いの下、活動している・したい主体が、主体性を発揮しやすい環境への整備(活動のアップデート)が重要。
⇒「主体的に関わりやすい機会の創出」、「多様な主体の交ざり合い、対話や連携・協働の推進」など
- 異なる活動主体同士の連携・協働には、行政や中間支援者など、媒介者の役割が重要。
⇒「活動や主体間をつなぐコーディネーター人材の育成やネットワーク化」など

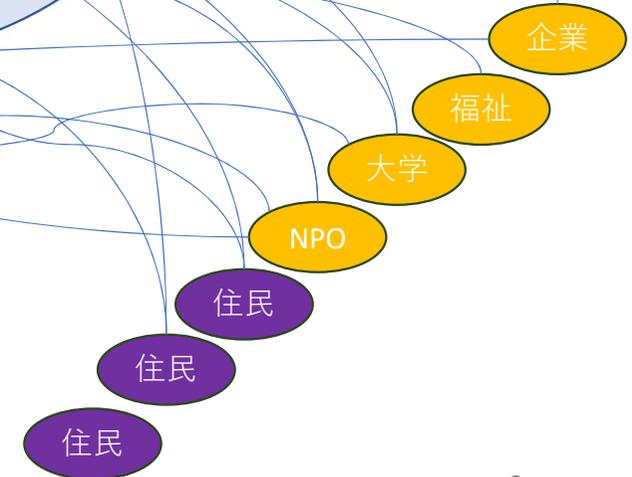
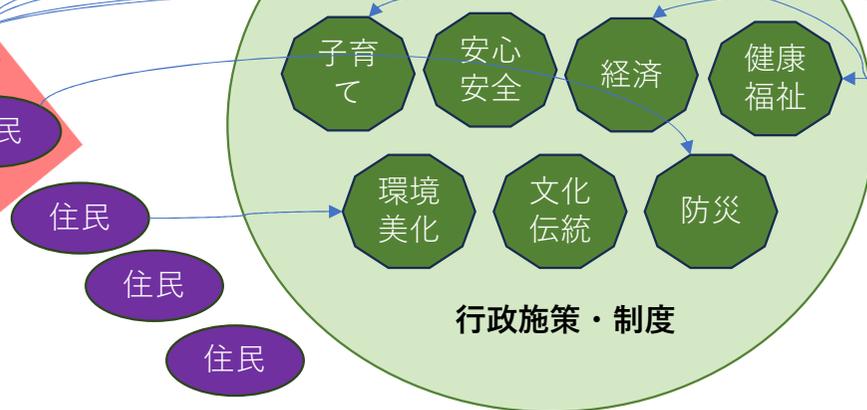
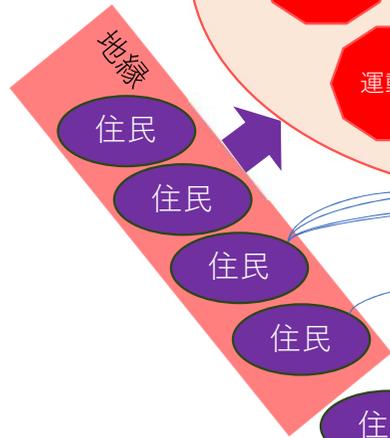
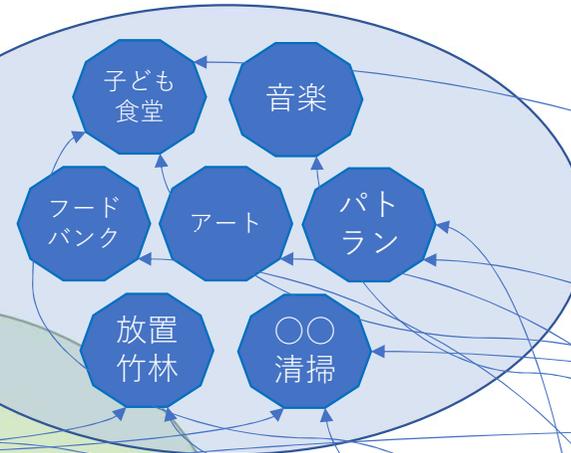
京都市のまちづくり活動(現在)

- ◎ 地縁をベースとした活動は、原則として地縁組織に加入している人が当番等で活動
- ◎ テーマをベースとした活動は、組織的なものから、有志・ボランティアで実施するものまで多様な形態で活動
- ◎ 自身と関係の深い領域を通じて市政参加

**地縁をベース
とした活動**
(身近な暮らしの
延長にあるもの)

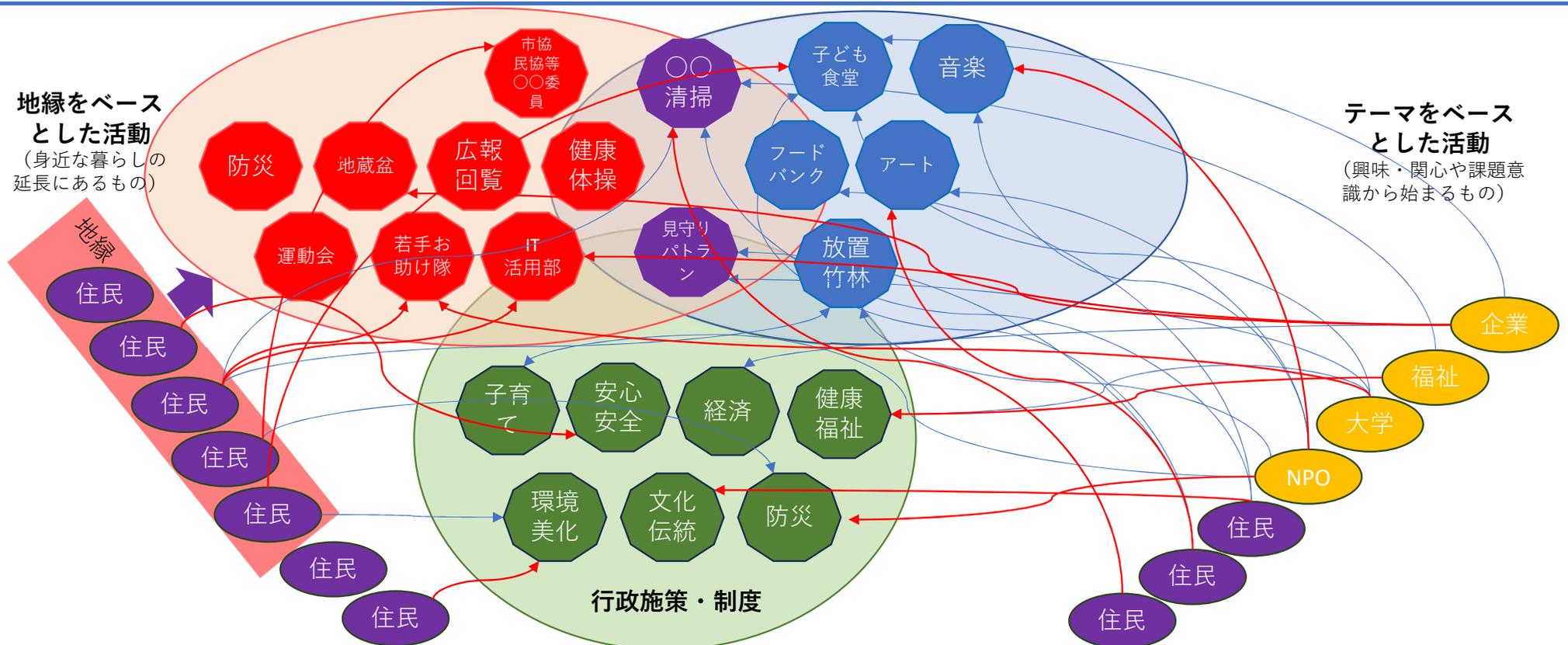


**テーマをベース
とした活動**
(興味・関心や課題意
識から始まるもの)



京都市のまちづくり活動(目指す姿)

- ◎ 地縁・テーマに関わらず、「活動の見える化・魅せる化」、「気軽に参加できる機会の創出」などを通じて、まちづくり活動への参加を促進する。(=ひらく)
- ◎ 「主体的に関わりやすい機会の創出」、「多様な主体の交ざり合い、対話や連携・協働の推進」を通じて時代に即した見直しを進め、協働を増やす。(=つなぐ)



⇒ まちづくり活動に参加し、つながりを持ち、身近な地域で居場所と出番がある地域社会をつくっていくこと
 = 広く市民のまちづくり活動への参加を促進する「市民参加」の考え方と通じる。

今後の方向性①(まちづくり活動への参加促進の視点)

<目指す方向性>

身近な地域でのまちづくり活動に住民をはじめ、多様な主体が参加したくなる、思いがけず参加してしまう仕掛けが、暮らしの延長線上に多くあり、住民等がまちづくり活動に関わり、緩やかにつながる中で、居場所や出番が生まれていくことを目指す。

取組の方向性と施策イメージ

<まちづくり活動の見える化、魅せる化の推進>

身近な地域でのまちづくり活動への参加につながるよう、SNS活用など活動のビジュアル化やデジタル化(支援)も含め、参加の入り口の見える化や個に届く情報発信を推進します。

<気軽に参加できる機会の創出支援>

身近な公共空間等において、気軽に参加できる機会や場づくりを進めます。

地縁に加え、学び縁や趣味縁をきっかけにした興味関心から始まる参加や、時間や場所に縛られずイベントだけ参加やオンラインでの参加など、多様な参加機会の創出を支援します。

<主体的に関わりやすい機会の創出支援>

子どもから高齢者まで幅広い世代の住民や地域企業や大学など多様な主体が、それぞれが持つ得意分野や専門性を活かすなど、地域の中で主体的に関わりやすい機会の創出を支援します。

人が持つ「わくわく」や「もやもや」など、表出されていない手前の感情を引き出す場づくりを進めます。

<地域活動への参加促進>

誰もが住みよく、安心・安全に暮らせる地域社会の実現につながる、防災や防犯、高齢者や児童の見守り、環境美化など地域活動が引き続き行われるよう自治会・町内会への加入促進や各種啓発に取り組みます。

今後の方向性②(持続可能な活動へのアップデートの視点)

<目指す方向性>

地縁団体をはじめ、市民活動団体、地域企業、大学、福祉団体等、多様な主体の連携・協働を促進し、それぞれが強みや特性を発揮することで、まちづくり活動への関わり方をアップデートや新たな行動を生み出すことを目指す。

取組の方向性と施策イメージ

<デジタルツールの活用促進>

デジタルツール活用支援による、情報共有の迅速化、負担軽減など、情報発信手段の多様化を支援します。

<多様な主体の交ざり合い、対話や連携・協働の推進>

地域の中で視点や得意分野の異なる多様な主体との連携や対話を進めながら、自分たちの地域の課題や特性を把握し、地域の将来像づくりや課題の洗い出し、活動の見直しに向けて取り組めるよう支援します。

<主体間をつなぐコーディネート人材の育成、ネットワーク化>

活動に参加した住民等が交流や対話を通じて、お互いを知り、共に活動を進めることができるよう、主体間をつなぐコーディネート人材づくりや、主体間の交流・ネットワークづくりを進めます。

<行政協力業務のアップデート>

行政からの依頼事務の担い手としての機能の負担軽減に取り組むとともに、時代に即した在り方を検討します。

今後のスケジュール(案)

地域コミュニティ活性化推進審議会、市民参加推進フォーラムが協力して、地域コミュニティ活性化×市民参加促進×区役所ビジョン（仮称）を作成していく。

	地域コミュニティ活性化推進審議会	市民参加推進フォーラム
令和7年7月	7月7日（月）本日開催	7月10日（木）10時～ 審議会の議論も踏まえ、議論開始
7月～	審議会開催 （パブリックコメント案の検討）	フォーラムの開催（月1回程度）
10月	パブリックコメント実施準備（議会報告、周知用印刷など）	
11月	パブリックコメントの実施	
12月	パブリックコメントのとりまとめ	
令和8年 1月～ 2月	パブリックコメントのとりまとめ	
令和8年 3月	審議会・フォーラムの開催 （パブコメ結果報告、計画案確認） 計画策定	

本日の議論のテーマ

- ◎ 今後、市民参加推進フォーラムにおいて、地域コミュニティ活性化推進審議会でも議論してきた内容を共有し、統合したビジョンの策定に向けて議論を進めていく予定としており、事務局でとりまとめた内容について、御意見、御議論いただきたい。
- 京都市のまちづくり活動（目指す姿）
- 今後の方向性
 - ・ まちづくり活動への参加促進の視点
 - ・ 持続可能な活動へのアップデートの視点
- ◎ 併せて、今後の方向性に掲げる取組を推進していくために、区役所（行政）に期待することについて、御意見、御議論いただきたい。